

平野（司会）はい松本さんありがとうございます。
した。

今までは、3人の方、みなさん、勤労青少年ホームの指導員ということで、それぞれご活躍をいただいている方です。

次はですね。少し変わります。まあ、勤労青少年ホームというのは、勤労福祉的な立場からの発想で生まれた施設な訳です。勤労福祉と言うよりはもう少し歴史的に長い分野として、社会教育というのがあります。東京都には、たいへんそういう社会教育というのがさかんでして、青年の家というのがたいたい都内に5館ぐらいあります。

次は、私たち一期生の中でもたいへんユニークな人物だと思うんですが、東京都の武蔵野青年の家、西村美東士さんをお願いしたいと思います。

東京都武蔵野青年の家

西村 美東士（1期生）

西村（講師）東京都武蔵野青年の家は、東京都の教育委員会の社会教育の関係の施設です。それで、勤労青年施設と内容的には同じようなことですが、行政のタテ割りからいくと全然ちがうんですね。

青年の家は、20年前に八王子にひとつ、東京都のができてるんです。あと御殿場に、あの国立中央青年の家ができてるけど同じ年にできてるんです。で、青年の家は、それ以前はなくてそれが一番はじめなんです。また、あの国立型の青年の家っていうのは、団体宿泊訓練に重きをおいてますが、東京都の場合は、自主的なグループ活動を育てるということですから、ちょっとちがいがある訳です。利用できるグループは、6人以上のグループです。一番優先されるのは、勤労青年の団体です。土、日も自由に使えるっていうことになってます。実態は大学生が中心です。

それから、生活日課としては、就寝は10時に

とです。社会教育の方では、専門職員の制度になっております。一般事務とは相当ちがう扱いで、他のところには、例えば水道局とか、そういうところは絶対に行けないし、事務の方の仕事をしたいと言っても、もうだめな訳です。そこで、私は、府中レクリエーション研究会というものに入りました。これは、青年たちの府中のまあ自主的な団体なんですけど、レクリエーションをやるということと、もうひとつは青年とのつながりをつけようっていうことではいりました。それで、今度主催事業やるんで、手伝ってくれっていうことで、ダンスフェスティバルをやりました。あのディスコのね。僕はディスコがうまいってんで有名だったんですけど(笑い)……

そこでちょっと新宿に、なんかステップ教室、ステップもちゃんと教えてくれるお店があるっていう情報を知りまして、そこに電話かけて、その人に来てもらって最初第1回目として、ダンスフェスティバルを12月に行いました。府中レクリエーション研究会の協力は今回限りだということで、実行委員会をあらたに発足させました。それでお金あんまりないんで、ミニレク研、ミニ型で自分たちで教えあうとか、ロックンロールがはやってたんですけど、ロックンロールでジルバを踊ろうとか、それからミニダンスフェスティバルとか、そんな感じでやってきました。クリスマスパーティとかね。それで54年にはいってだんだんこういうふうになっていくうちに、もっと生きがいとか自分たちの生き方とか、そういうのも話し合いたいということですね。ぶっちゃけディスカッションとか、そんな感じでやってきます。

目的は、やはりひとつはもうちょっと来る青年の巾をひろげたいということです。どうしても優等生的な青年だけ来ててもしょうがないというようなこととか、それから、レクリエーションサークルってのは、あまり交流しないので、他のレクリエーションサークルと交流したりするなかで、またひとつのよさがあるんじゃないかというようなことです。成果としては、ホームの方でも同じだ

と思いますが、青年と青年のふれあいたいなものが出てきている訳です。それから特に参加者もそうですけども、実行委員が一番成長してきているんじゃないかと、思える訳です。

それでは、レジュメの方を見て下さい。
青年の家に3年ちょっと勤めて

I 青年とのつきあいかた

1. 「指導性」
— 「落書禁止」 —
2. 「対策」から「サービス」
3. 「環境醸成」
4. 「ジェネレーションギャップ」
— 「今の若いモンは…」
5. いま、青年たちはどうなっているか
— 「やさしさ」 — 「お誕生日会」
— 暴走族の「ミーティング」 —
6. たとえば、実行委員会形式で感じたこと
「ウラカタさん」をやらせることについて

II レクリエーションについて

1. 「レク指導」の基本的な方法の転換期?
2. 「ディスコ」を3年やってみて……
高校生の問題
「青年の家」族以外の青年たち
楽しいことは、いいことだ。
ディスコ、オートバイ、スキューバダイビング etc.
「世界が広がる感じ」

一応大きく2つに分けております。1つは、「青年との付き合いのかた」ということです。まだ自分でわかった訳じゃないんで、こうじゃないかなっていうぐらいのことしか言えませんが、第1は、指導性っていうか、教育の方では、よく教育的指導性ってなことを言う訳です。で、指導っていうことばを使う訳ですけども、例えば「週間都庁」(都民生活局広報部)というのが出てま

すけれども、これによると、「落書厳禁」とやれば、「何言ってやんで」と反発する御仁も現われるということだね。そういうように、ただ「何々ししてはいけません」てのが指導ではないってことです。ひとつ考えている訳です。

次は、「対策からサービスへ」ということです。これは教育ではなくて、都民生活局の方の全般的な青少年問題協議会ってところの意見具申です。おとしの答申（「盛り場と青少年について」53年2月）ですけれども、これによると、盛り場の青年たちは、非行対策の目であらえていくって、そういう時代はすぎたんじゃなくかというんですね。サービスとして考えていくこと、つまり「青少年の自己開発を援助するために行われる組織的な活動」としてとらえる考え方なんかでてます。

3番目は、「環境醸成」——こうしなさい、あしなさいではなく、かもし出すような感じ。だから、直接押し付けるようなかたちじゃなくて、やってくっていくことになる訳です。

それで、4番は、「ジェネレーションギャップ」——世代のちがいということで、今の若いもんはってことになる。すでに僕らも、20才位の人を見ると、世代のちがいを感ずる訳ですけれども、これは、昔から今の若いもんはという。今の若いもんはって言われた人が、また年をとってね、今の若いもんはって言う訳で、やはりどの時代でも同じだったんじゃないかって気がする訳です。

そんなことで4番まで、思いつくまま書いたんです。

それで、「いま、青年たちはどうなっているか」ということが、やはりこういう仕事をする際に自分なりにとらえる必要があるんじゃないかと思えますけれども、一つは、「やさしさ」ということが言えると思います。「お誕生日会」って書いてありますけれども、これは、別に保育園とかね。そういうところでのお誕生日会じゃなくて、今大学ではやっているお誕生日会なんです。クラスで、今度は誰々さんのお誕生日だからみんなで

お祝いしよう（笑）、そういうのがあるそうなんです。それで、すごくやさしくてね、ほほえましいところをいま、青年たちはもっているんじゃないかというようなことです。

ただ、次に「暴走族のミーティング」って、どういふふうにやっているかっていうことです。とにかく、バァーッと走って、非常に楽しいと、それでどこか、オートバイかなんかを止めて、みんなで休みます。その時に、ほとんど何もしゃべらないそうなんです。あとミーティングなんかもある訳ですけれども、自分がどこで動いているのか、身の上話ってのかな、そういうのはほとんど聞こうともしないし、あまり言いたくもない。そういうふうな関係がある。で、その辺と「やさしさ」とをつなげてはいけないかもわからないが、何かやさしいけれども、例えば、仲間が悩んでいることとか、そういうことへは立ち入ろうとはしない。そういう意味での「やさしさ」じゃないんかって、批判的に言えば、そういうことなんですけれども、そんな感じになっているんじゃないかと思うんです。

それで、6番はこれも、またちょっとちがう話になりますけれども、主催事業を「実行委員会」ってことでやっている訳です。そこで、いろいろ青年とのつきあいがあった訳です。それで、実行委員会と言うと、みんなにやってもらえるから、職員は楽じゃないかっていう考え方をもっている人が、まわりの職員にいますけれどもね。全く逆で、こういうのやると、相当きつい、何回も集まりを持たなきゃいけないし、こっちが最初からのお綿立てしちゃった方がもっとスムーズにいく。簡単だし、負担でもないということって意外とある訳ですね。だけど、そこでがまんしてやってくっていくことが必要なんじゃないかと思えます。

それで、青年というのが、やはり表に飛び出して、例えばみんなで集まったときに、受付をやるんじゃないくて、レクダンスの指導をやりたい、そういうふうな気持というのはある訳です。で、そ

れがわかるような気もするし、そういうのを認めてあげて、どんどん目立つような場所に送り込んでいってやるべきなのか。それとも、裏方もやはりやって、経験してもらうべきなのか。裏方の中に、それなりにそのよさも……、その人の成長もあるんじゃないかっていう、人間の深いところまで見ていく力をつけられるだろうってなことも感じております。だけど、これには、結論は出てない訳です。

あと時間もないんですが、大きい区分の2番目で「レクリエーションについて」っていうところですよ。

一つは、「レク指導」の問題です。今まで、内気な青年たちの多かった頃というのは、何でもいいから、こう手を握り合ってみたとか、そういうのは、今までにない、人生にないきっかけだったんじゃないかっていう気もします。けれども、今は、意外とお互いに、どんどん自分のことを自己紹介して、売り込んでいくっていう能力があるんじゃないか。そこで、また、無理やりに、最初から内気な青年を相手にするようなやり方じゃなくても、自主的な形で、レクリエーションを行っていくような、創造性を伸ばすような、ひとりひとりのレク指導を、これは実際むずかしいかもわからないけれども、そういうのを考えたいと思っている訳です。

それで「ディスコ、3年間」やった訳ですけども、いろんな問題をここで感じました。一つは、高校生というむずかしさね。今在学青少年を対象にした問題というのが出てまして……。これを重視していかなきゃいけないっていうことで、社会教育でやる訳ですけども、たとえば、ディスコなんか行くようになったらどうするんだとかね。そういう批判もある訳で、これはむずかしいなと思ってます。

それから、もう一つは、「青年の家」族というさっき言った模範生みたいのが多い訳ですが、そういうところに来ないような青年たちを引っぱりたいということで、ディスコもやった訳です。で、

やはりその中には、ディスコボーイなんかでも何人も来ましてね。はじめのうちは、彼らは教えるとか、そういうのはみっともないし、やらないんですね。みんなでやっても、どんどんむずかしいおどりをひとりでやっちゃうんです。そういう連中が何人も来てた訳ですけども、そのうちの何人かは、3年目ぐらいには、実行委員会なんかにも呼んだりしてやってく中で、なんとか右足を出して、とか言って指導してくれるようになりました。その辺が3年間やってみて一番印象に残っていることなんです。

それで、最後に、レクリエーションをもっとこれからひろげていきたいと思う訳です。例えば、「ディスコ」の楽しさね。踊るスポーツ的な良さというのは、参加した女の子が言ったんですけども、体育館みたいだと。実際体育館でやった訳ですけども、ディスコっていうのは、体育館みたいだっていう、そういうことに表われているような、スカッとした良さ。踊っているときの楽しさみたいもの。やっぱり、いいんじゃないかなあという気がします。あと、「オートバイ」とか「スキダイビング」とか、いろいろあると思います。

要は今まで知らなかった世界、スキダイビングで海にもぐれば、今までこれだけだったものがバーとひろがる。海の世界ってのが広がる。そういう意味で楽しい世界を広げていくっていう良さってのを、これからのレクリエーションは、必要としているんじゃないかなって思ってます。

以上です。

平野（司会）どうもありがとうございました。

休けいが終わった後の進め方として、一応質問を取るわけですけども、今紙を一枚おわたしたいしますので、一番質問したいことを書いてください。

今、パネルの方々といっしょにみなさんの質問表を読ませていただきました。それで山内さんへの質問が多かったです。新城の場合に、設立当初の問題なんかを質問して書いてあることをふま

えて、簡単にお話しをしてもらいたいと思います。
山内（講師）しつれいします。最初は飯田さんの質問にお答えします。

ホーム利用のPRの件ですが、私が講座を3月の下旬に一応修了するというので、その前に、市内の事業所の人事であるとか、労務担当者に市の方に来てもらいまして、ホームとは、どういったものであるかについて理解を求めたわけですね。と同時に、その時にホームは登録制をとっていますので、登録の申請の仕方を説明をして、申請書を25才までの方の人数分だけもっていったいただき、後日、ホームの方に出してもらって、利用者を確保したとか、そのような仕事を3月いっぱいやりました。その後は、例えば新聞等でのPR、特に地方新聞とか、市の公報そのほか市にある有線放送を利用しました。それから、口コミなんか効果もあります。個人利用の形で来た利用者に対して、口コミでその知合いに来てもらうよう勧奨したりしました。

このごろでは、ちょっと質問からはずれますけど、PRはだいたい登録者に対して、ダイレクトメールでやっています。また、市には、記者クラブがありまして、毎日とか朝日であるとか、うちだと中日新聞の記者がおりますけど、行事がありますと、その記者クラブへどんどん募集案内をほうりこむわけです。そうすると、電話がばーと鳴って、詳しいことをおしえてほしいといってきます。そういった形で、新聞を大いに利用しています。

次に既存の青年団体との関係です。新城市には、もう一つ雇用促進事業団が設置した「いいこの広場」という施設がありますけど、これのちょうど東側に、青年の家というのがあるんですね。それで、うちのホームは、場所的に言いましても、市の中の一等地にあるわけです。市役所に近くて、町のまん中にあるわけです。一方、青年の家は、内容的にはまったくホームと同じですが、所轄がちがうこと、山の中腹にあるもんですから車でないといけないうことなどの問題があるわけです。そ

のあたりのことは、行政的にどういうふうを考えていこうかということで、市の上層部の方でも、いろいろともめたらしいんですけど、結局青年の家というのはあくまでも、青年団（もちろん社会教育団体もふくめてですが）のための施設であって、青年団の活動というものは、青年の家でやってもらうようにし、青年団に入っていない青年組織とか、個人利用とか、それと気がるにグループを作って、利用するといった場合は、一応ホームの方へ来てもらおうじゃないかということになったわけです。同じ市の施設で、かたよりが生じることがないように、市の方の行政的な指導として、青年団は、青年の家を利用してもらって、それ以外の者は、ホームを利用してもらうということです。もちろん、個人利用に関しては、かまわないと思います。青年団に入っていて、例えば、お花がやりたいと言って、来てもらうのも結構だと思えますけども、グループで活動する場合は、やっぱり、そういった施設のふりわけというような指導をしています。

次に佐藤さんの質問で最初の1年間の運営状況に関してお答えします。

うちの方の場合、松本さんと同じように、運営面については、一応、私がほとんどまかされております。ホームの柱とはどういうものか、御存知だと思いますけれど、行事、グループ活動、講座なんですね。それで最初の年はおもに、クラブ活動を盛んにしようということでしたが、オープンした最初の1カ月は、まったく閑古鳥が鳴く状態でした、なかなか、利用者が来なかったわけですね。卓球の個人利用がせいぜいあるぐらいでした。3カ月目ぐらいになりまして、ちょうど今ごろですね。「勤労青少年の日」の行事をやるというわけで、キャンプを挙行政したわけです。一応50名募集のところ実際20名少々集ったようなわけで、最初のところ、失望しました。それでも、クラブ活動の方は、ぼちぼち、軌道に乗りはじめていったわけです。4カ月、5カ月、半年すぎたころになりますと、例えば、テニスクラブというの

がありますけど、それから、紅白試合をやるという話が持ち出されてきました。オープンして1年たちますと、ある程度、ホームというのはこういったところなんだなという感じで、クラブ活動自体はもり上がってきました。(講座は、まだやっていませんでしたけど)

2年目になりますと、ある程度上昇気流になっていきましたし、また、去年は、いろいろと近くのホームへ交流を働きかけたり、県下のホーム交流会に参加したりとか、講座を始めたりですね、少しづつですけども、着実に進歩していると思います。

ここで申し上げたいのは、クラブ活動というのは、ある程度働きかけていけば出来やすいと思うのですね。しかし、最初は、すぐ盛り上がりがあるんですけども、すぐマンネリ化がくると思うんです。ですからある程度、利用者の確保という意味からも、やっぱり1年目から講座をどんどんやっていくべきだと思います。そうしないと関古島が鳴いている夜のホームほど、さみしいものはないですし、利用者が来ないと自分たちの仕事になりませんからね。ですから、花嫁学校だとか言われますけどね。ある程度利用者を確保して、そういったところから出発した方がよろしいかと思うんです。

それから勝山さんの質問ですが、ホーム開初当時の仕事としては、先ほど言いましたように、マスコミを利用するとか、それ以外に、個人的に来た場合には、その人の趣味とか、特技を聞いたり、施設の趣旨を説明して、なるべくグループ作りをするようにすすめました。それから行事の決め方につきましては、最初から利用者の間に、組織だったことはないので、私が、よそのホームの参考資料を集めまして、ありきたりの行事ですけども、夏にキャンプ、秋には、たとえばリング狩りとか、12月にはクリスマスパーティーなどをやりました。大きなことは、それぐらいで、そのほかスキーもやりました。以上です。

平野(司会)はいわかりました。ありがとうございます。西村さんにもいくつか、質問がきています。ちょっと手短かに、おねがいします。

西村(講師)お答えします。

ちょっと言葉が足りなかったんですが、「対策からサービスへ」ということで、青少年問題協議会の答申が出たんですが、サービスということでもいいかどうか、ちょっと僕もわかりません。できれば教育の面から言えば自己教育ということを重視しなければいけないということがあります。自己教育というのは、みずから学ぶということで、これが、スプーン学習とか、サジ学習というんですけれど、赤ん坊が、スプーンを使えるようになるまで、これは、単に母親が教えることも必要なんですけれども、母親の力でなくて、結局、本質的には、赤ん坊の力で覚えていく。そういうふうな人間の学習というのは、そもそも、自己教育、自ら学ぶことが本質になるだろうというところが言われていて、そういうふうなところから、自己教育ということを大切に、やっていく必要があるだろうということを言いたかったんです。

それから、レク指導をやっていて、誰か一人がなんというか、パッと芽がでたら、それをひきあげて、レク指導者じゃなくてその人を主人公にさせて、うまくその1時間なら1時間を運営させてくというのがこれからの指導者には必要なんじゃないかというふうな話があるわけです。

ほかにもこういうふうな思うわけなんです、…例えば、あのゼスチャー大会などでも、ほとんど指導者のでるまくがない。一人一人が積極的にでていく、こういうふうなレクリエーションの場所が必要なんではないか。

これからは、それだけの表現力とかそういうのが若い人達にはあるんじゃないか。そんなに内気でもないだろうと、そういうふうな事を考えたらどうかってことです。